

## 「いわゆる」社会貢献活動する意思を持たない高齢者の特徴

公益財団法人 ダイア高齢社会研究財団 研究部 主任研究員

澤岡詩野

### 1. はじめに

高齢者を支援しなければならない弱者と一様に位置づけたのは一昔前のこと、近年では社会・地域資源ととらえる「プロダクティブ・エイジング」の概念が普及しつつある。これと共に、社会活動のなかでも、単に自らの楽しみに完結する活動だけではなく、他者に何らかの力を提供する「プロダクティブ・アクティビティ」が着目されている。プロダクティブ・アクティビティは、有償労働（収入のある仕事）、家庭外無償労働（別居家族への支援、友人や近隣への支援、ボランティア）、家庭内無償労働（家事、同居家族への世話）の3つに分けられる。

これら3つの活動のなかでも社会貢献活動、ボランティア活動は男女ともに、活動した高齢者のウェルビーイングに良い影響を及ぼすことが知られている<sup>1)</sup>。さらに、豊富な経験や知識をもつ高齢者が社会貢献、特に地域づくりに関する活動を行うことは、社会にとっても多くの恩恵を得ることが指摘されている。実際に、読み聞かせボランティアとして活動した高齢者の主観的健康感や体力が向上したといった健康増進の効果に加え、高齢者が近隣に提供するサポートの増加といった地域社会への寄与についての効果が報告されている<sup>2)</sup>。

介護や認知症予防、生きがい創出といった高齢者自身への効果、豊かな地域づくりにつながる活動として期待される社会貢献・ボランティア活動であるが、日本ではボランティア活動に参加している高齢者は多いといえない。著者も分析検討会の委員として関わった「平成25年度高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」<sup>3)</sup>によると、参加したいという意識をもつ人が12.7%存在していた。しかし、実際に参加している人の割合は5.4%に過ぎず、健康・スポーツや趣味の活動にくらべても僅かであった。

2016年度に行われた介護保険の改定では、高齢者を生活支援の担い手として位置づけており、今後は、これまでプロダクティブ・アクティビティに関与してこなかった人も含めた、参加のすそ野を拡げていくことが求められている。しかし、実際に地域社会で見られるのは、一人でいくつもの役割を果たしパンク寸前な町内会長や、世代交代が進まないまま疲弊するグループのリーダーの姿といえる。そこで本提言では、社会貢献活動に参加していない人、その中でも特に「活動する意思を持たない人」に焦点をあてて分析を行う。

### 2. 社会貢献活動を「していない」のはどんな人なのか？

現在行っている家族や社会を支える社会活動（単なるご近所付き合いや、一人で活動している場合は除く）について、「自治会、町内会などの自治組織活動」「まちづくり

や地域安全などの活動」「趣味やスポーツを通じた社会奉仕活動」「伝統芸能・工芸技術などの伝承活動」「生活支援・子育て支援活動」「その他」から複数回答で尋ねた(Q22)。この結果、最も多かったのが「自治会、町内会などの自治組織活動(18.9%)」で、統計的に年齢による有意な差が認められた(60~64歳21.4%、65~74歳21.6%、75歳以上13.9%)。続いて行われていたのが「趣味やスポーツを通じた社会奉仕活動(11.0%)」で、自治会、町内会などの自治組織活動とは異なり、年齢による有意な差は認められなかった(図表1)。

図表1 社会貢献活動の実施状況

	全体	60~64歳	65~74歳	75歳以上	
自治会・町内会などの自治組織活動	18.9	21.4	21.6	13.9	**
まちづくりや地域安全などの活動	3.5	4.5	4.3	2.1	*
趣味やスポーツを通じた社会奉仕活動	11.0	8.6	12.4	10.1	
伝統芸能・工芸技術などの伝承活動	1.2	1.5	1.3	0.9	
生活支援・子育て支援活動	1.5	1.8	1.9	0.9	
その他	2.9	2.7	3.0	2.8	
特に活動はしていない	69.9	68.8	66.2	75.7	**

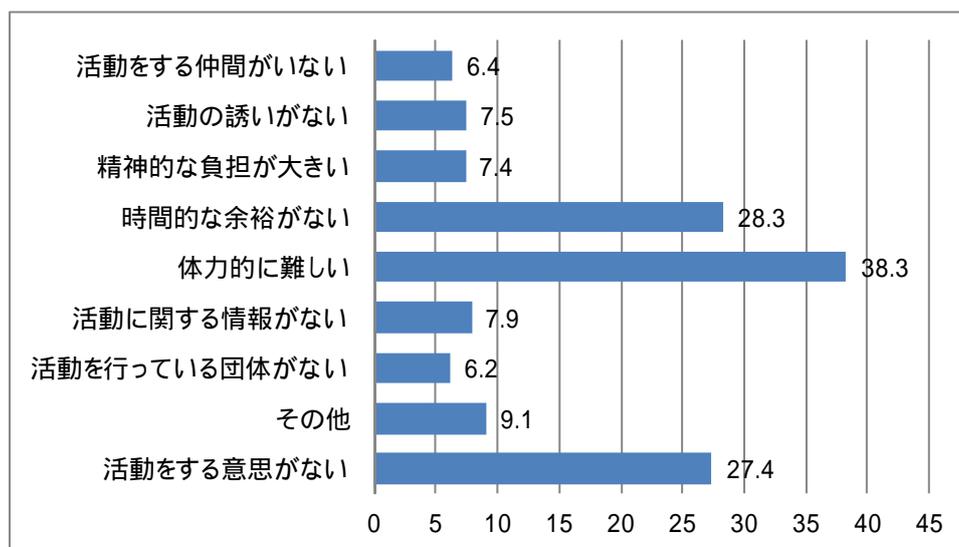
一方で、「特に活動していない」と回答した人は69.9%(1,381名)存在していた。この「特に活動していない」人は、男性よりも女性、60~64歳・65~74歳よりも75歳以上、一人暮らし、最終学歴が大学・短大・専門学校よりも高校、高校よりも小学校・中学校、所得の低い群、有業よりも無職で多くみられた(図表2)。

図表2 社会貢献活動をしていない人の特性

		活動していない	活動している	
性別	男性	63.9	36.1	**
	女性	75.0	25.0	
年齢	60~64歳	68.8	31.3	**
	65~74歳	66.2	33.8	
	75歳以上	75.7	24.3	
一人暮らし	該当	74.7	25.3	
	非該当	69.1	30.9	
最終学歴	小学校・中学校	80.7	19.3	**
	高校	68.2	31.8	
	大学・短大・専門学校など	59.9	40.1	
1か月の所得	10万円未満	80.7	19.3	**
	10~20万円未満	71.5	28.5	
	20~30万円未満	63.9	36.1	
	30~40万円未満	64.5	35.5	
	40~50万円未満	59.2	40.8	
	60万円以上	57.7	42.3	
就業状況	有職	64.5	35.5	**
	無職	72.5	27.5	

さらに、特に活動していない人の「活動していない理由」を、「活動をする仲間がない」「活動の誘いがない」「精神的な負担が大きい」「時間的な余裕がない」「体力的に難しい」「活動に関する情報がない」「活動を行っている団体がない」「その他」および「活動する意思がない」から複数回答で尋ねた（Q29）。この結果、「体力的に難しい（38.3%）」が最も多く、「時間的に余裕がない（28.3%）」が続いていた（図表3）。

図表3 活動していない人の「活動をしていない理由」（複数回答 %）



これらの理由には年齢による差が認められ、体力的な理由を挙げるのは60～64歳で19.9%、65～74歳で29.2%、75歳以上では58.0%と、加齢に伴い社会貢献活動に関わることが困難になりつつある後期高齢者の現状がみえてくる（図表4）。一方で時間的な理由を挙げるのは60～64歳で51.5%、65～74歳で32.0%、75歳以上では13.3%と、就労や家事などで社会貢献活動に時間を割くことができない向老期・前期高齢者の状況がみてとれる（図表4）。

活動したいという想いをもちつつも活動することができない高齢者が存在する反面、無視することのできないのが、そもそも「活動する意思がない人（27.4%）」の存在といえる。事項では、社会貢献活動を行っておらず、活動する意思を持たない高齢者の特性について分析していく（図表4）。

図表4 社会貢献活動をしていない人の「活動していない理由」

	全体	60～64歳	65～74歳	75歳以上	
活動をする仲間がない	6.4	11.7	6.3	4.3	**
活動の誘いがない	7.5	13.0	8.6	3.7	**
精神的な負担が大きい	7.4	9.1	8.9	4.7	*
時間的な余裕がない	28.3	51.5	32.0	13.3	**
体力的に難しい	38.3	19.9	29.2	58.0	**
活動に関する情報がない	7.9	15.6	8.3	3.9	**
活動を行っている団体がない	6.2	7.4	8.2	3.3	**
その他	9.1	7.8	8.5	10.4	
活動する意思がない	27.4	22.1	29.6	27.0	

### 3. そもそも社会貢献活動をする「意思がない人」はどんな人なのか？

社会貢献活動をしていない人のなかで「活動する意思がない人」の特性を分析してみると、統計的に有意な差が認められたのは、最終学歴と一か月の所得、就業状況であった（図表 5）。前項で述べた「社会貢献活動をしていない人」と同様に、最終学歴については大学・短大・専門学校よりも高校、高校よりも小学校・中学校、低所得、有業よりも無職で意思のない人が多くみられた（図表 5）。

図表 5 社会貢献活動をしていない人の中で「活動する意思がない人」の特性

		意志がない	意志がある	
性別	男性	25.9	74.1	
	女性	28.4	71.6	
年齢	60～64歳	22.1	77.9	
	65～74歳	29.6	70.4	
	75歳以上	27.0	73.0	
一人暮らし	該当	29.4	70.6	
	非該当	27.0	73.0	
最終学歴	小学校・中学校	31.9	68.1	**
	高校	26.9	73.1	
	大学・短大・専門学校など	21.0	79.0	
1か月の所得	10万円未満	33.2	66.8	**
	10～20万円未満	28.0	72.0	
	20～30万円未満	20.4	79.6	
	30～40万円未満	29.7	70.3	
	40～50万円未満	25.9	74.1	
	60万円以上	14.6	85.4	
就業状況	有職	20.5	79.5	**
	無職	30.4	69.6	

次に、活動していない人に、しておくべきと思う準備、「60歳になる前からやっておくべきと思う事」を、「一緒に活動する仲間を作ること」「指導者・リーダーを見つけること」「社会活動・地域行事に参加すること」「自治会等の自治組織に参加すること」「知識・技能を習得すること」「社会的な活動の情報を収集すること」「資金を貯めておくこと」「家事分担などして時間を確保すること」「食生活の配慮や運動をすること」「その他」および「やっておけばよかったと思う事はない」から複数回答で尋ねた(Q30)。この結果、「食生活の配慮や運動をすること(18.1%)」といった健康管理を挙げる人が最も多く、60～64歳で29.0%、65～74歳で17.4%、75歳以上では14.1%と年齢が若いほどに健康面を重視している傾向が認められた（図表 6）。

続いて多く挙げられたのが「知識・技能を習得すること(全体14.3%、60～64歳28.1%、65～74歳で15.5%、75歳以上では6.4%)」、「資金を貯めておくこと(全体11.5%、60～64歳19.9%、65～74歳で12.1%、75歳以上では6.8%)」で、これから活動を行うための準備として向老期前後にある人で重視する傾向がみられた。

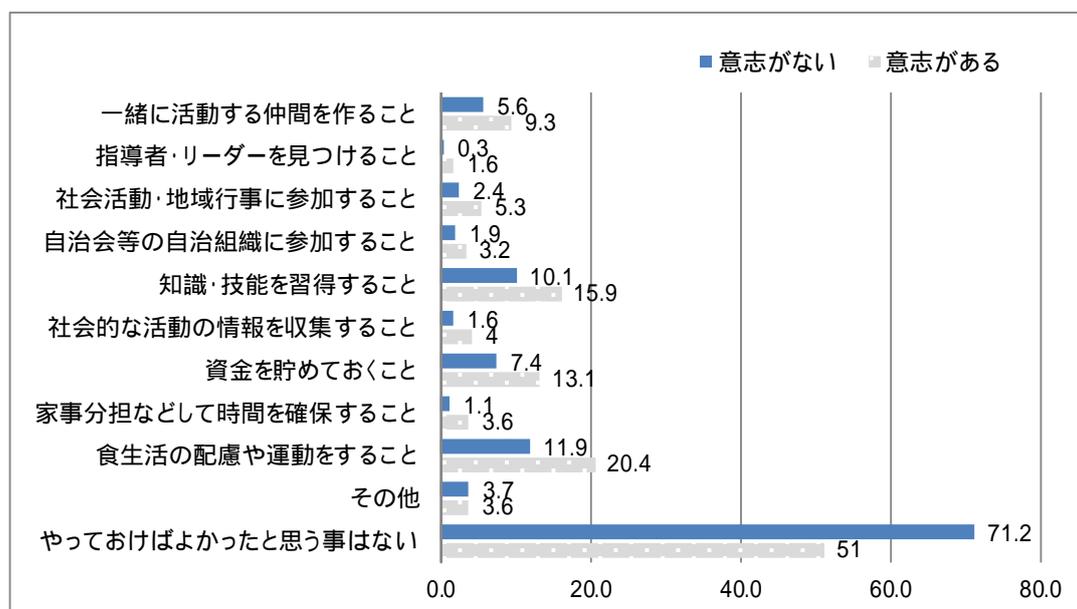
一方で、活動していない人の56.6%が「やってあげばよかったと思う事はない」と回答しており、この割合は60～64歳で36.8%、65～74歳で54.2%、75歳以上では68.4%と、年齢が上がるほどに高かった(図表6)。

図表6 社会貢献活動をしていない人の「しておくべきと思う準備」

	全体	60～64歳	65～74歳	75歳以上	
一緒に活動する仲間を作ること	8.3	14.3	9.7	3.7	**
指導者・リーダーを見つけること	1.2	3.0	1.1	0.6	
社会活動・地域行事に参加すること	4.5	6.5	4.9	3.1	
自治会等の自治組織に参加すること	2.8	4.8	2.8	2.0	
知識・技能を習得すること	14.3	28.1	15.5	6.4	**
社会的な活動の情報を収集すること	3.3	6.9	3.9	1.0	**
資金を貯めておくこと	11.5	19.9	12.1	6.8	**
家事分担などして時間を確保すること	2.9	6.1	3.8	0.4	**
食生活の配慮や運動をすること	18.1	29.0	17.4	14.1	**
その他	3.6	2.6	3.6	4.1	
やってあげばよかったと思う事はない	56.6	36.8	54.2	68.4	**

さらに、社会貢献活動を「行う意思がある人」よりも「行う意思のない人」の方が「やってあげばよかったと思う事はない」と回答していた(行う意思がある人51.0%、行う意思のない人71.2%、図表7)。

図表7 60歳になる前からやっておくべきと思う事(複数回答%)



## 4. まとめ

### (1)「いわゆる」社会貢献活動の現状

本調査では、社会貢献活動を「家族や社会を支える社会活動(単なるご近所付き合いや、一人で活動している場合は除く)」と定義し、参加状況を尋ねた結果、「特に活動していない人」が回答者の7割を占めた。この数字を多いと捉えるか、少ないとするかはわかる処であるが、諸外国とくらべると日本の高齢者の社会貢献活動への参加状況は活発とはいえない。『平成27年度 第8回 高齢者の生活と意識に関する国際比較調査』では、ボランティア活動の参加状況として「全く参加したことがない」と回答した人の割合が日本では5割を占める一方で、アメリカやスウェーデンでは2割と少なかった。この原因として、欧米では日本よりも社会貢献活動やボランティア活動が文化として根付いているという指摘も聞かれるが、言葉自体のもつ意味の重さが影響していることも考えられる。実際に、著者が関わったアンケートとインタビュー調査でも、アンケートで「社会貢献活動をしていない」と回答しても、インタビューでは「通学路のゴミ拾いを毎日している」や「自主的にサークルでお茶出しを毎回している」などのプロダクティブ・アクティビティを行う高齢者に出会うことが少なくない。社会貢献活動に関わる人、関わっていない人の実態を正確に捉えていく為にも、役割の明確な「いわゆる」社会貢献と認知された活動に限定せず、広く捉えていくことが求められている。

### (2)活動する「意思を持たない人」の実態

本調査で尋ねた「いわゆる」社会貢献活動については、活動をしていない人には「意思を持ちながら活動できていない人」と「意思を持たず活動していない人」の両方が存在していた。前者は、全体の5割(1,003名)を占め、若い頃からの健康管理に加え役立つ知識・技能、資金の準備不足を後悔する60代の姿が想像された。一方、回答者全体の2割(378名)を占める「意思を持たず活動していない人」は、学歴・所得が低く、無職といった特性がみられた。また6割弱が、「60歳になる前から活動をはじめるときの準備としてやっておけばよかったと思うことは無い」と考え、この割合は年齢の上がるほどに高くなる傾向が認められた。ここから、そもそも中年期・向老期から社会貢献活動に対する関心が薄く、加齢と共に身体の衰えや誘ってくれる友人・知人の減少などの活動を阻害する条件が増えていった結果として現在に至るという過程が想像された。今後、社会貢献活動に関わる人を増やしていく為には、「意思を持ちながら活動できていない人」と「意思を持たず活動していない人」、それぞれに異なる働きかけを行っていくことが重要である。

### (3)「社会貢献活動」する人を増やしていく為に

中年期、早い段階からの社会貢献活動への働きかけの重要性が指摘される中で、それらは有効に機能していないのが現状といえる。この原因として、仕事と子育て、親の介護などで手一杯な現役世代の置かれた状況が挙げられるが、加えて、ストイックに滅私奉公で活動に向き合う立派過ぎる先人の背中への恐れが考えられる。実際に、「町内会活動に誘われたけれど、今の役員たちの様に時間や力を割く事はできない」と、関わりを拒否する声を聞くことが少なくない。負荷を減らし、マイペースに長く続けられる活

動スタイルも尊重していくことが、社会貢献活動する人の裾野を広げる為の第一歩といえる。自治体ベースの一つの取組として、千葉市や新潟市で展開しつつある民生委員協力制度<sup>5)</sup>が挙げられる。高齢者宅訪問を一緒に行うなどのサポートを協力員が行うことで、負担を軽減し、後継者の育成も視野にいれた取り組みといえる。

さらに、今後、ますます増えていくことが予想される「意思を持たず活動していない人」については、社会や地域への貢献という側面だけではなく、住み慣れた地域で安心して豊かに歳を重ねる為の「自助」としてのプロダクティブ・アクティビティという視点を、向老期になる前から啓蒙していくことが求められている。

#### 【参考文献】

- 1) 柴田博，杉原陽子，杉澤博．中高年日本人における社会貢献活動の規定要因と心身のウェルビーイングに与える影響；2つの代表性のあるパネルの縦断的分析，応用老年学，6(1)：21-38(2012)．
- 2) 藤原佳典，西真理子，渡辺直紀ほか．都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム；“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果，日本公衛雑誌，53(9)：702-713，2006．
- 3) 内閣府，平成25年度 高齢者の地域社会への参加に関する意識調査  
<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h25/sougou/gaiyo/index.html>  
(2016/10/24)．
- 4) 内閣府，平成27年度 第8回 高齢者の生活と意識に関する国際比較調査  
<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h27/zentai/index.html> (2016/10/24)．
- 5) 千葉市，民生委員協力制度  
<https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/chiki/fukushi/kyoryokuin.html>  
(2016/10/24)．